

校舎の、やにひっそりしちまふ中で……俯向いて、鉛筆を舐め
く、ア●ブック●イン●マイ●ハンド……やったもんです。
……ア●ブック●イン●マイ●ハンド……ア●ブック●イン●
マイ●ハンド……

教へるのが、顔色の冴えない、どこかに何か病気のありさう
な、老嬢オールドミス、と申すので……しかし、気立は優しい先生で……時
々、白墨の音を、ツ、ツウ……と立てる。と、何処かに遠く、影で
も棲みさうな、奥のくあたりで、扉の閉まるあとの反響が、コー
ン……と、妙にさびしく、ガラスにあった薄日が消える……。それで
も、雨の日には、寒からうの親ご、ろで——その頃の子供は着た
——二里釦に頭巾のついた、新しい外套の、羅紗の匂ひに包まれる嬉
しさもあって……嫌やくが、やっぱり通ったものでした。

日暮を急いで、かう、薄いリーダーを胸に抱へて、やうやく
町端れの曲壁近く来か、ると、裏店の露路に塞がる悪太郎共が
帽子の徽章を見付けて、わ——いと囁す。見ぬ振で怖々抜けると、
パチーン。後ろから、黄色い匂ひのカンシヤク玉です。生来の
影弁慶、東海道へか、るやいなや、夢中で駆出すが精一ぱい。
時には、松の下から涙ぐむ……その街道がまた四五丁……して
夕暮を通るものは——戻りの馬力か、円太郎。稀に、威勢のわ
るい棒手振りの魚屋ぐらゐで——あ、まだ通る——嫌やものが
もう一つ。左の山で、隠亡が気早に火を入れた日は、鼻を掠め
に、水田を渡って……。なれてはゐても、淋しいなど振向くあ
たりに、この頃、片側の土堤を毀して、初めて一棟長屋が建ち

ました。それがまた、せいぐ、渡り者の、塗師屋か洋傘直し
が入りこむ程の——端れの羽目には、大きく「毒滅」と、あの
憎さうな大入道の看板が眼をむいてた……

御免なさい。うっかり前が長すぎました。街道端だ端折りませう……

その冬のある日——十三里の立行灯の前では、急に家が恋し
く、棒鼻のカンシヤク玉もどうやら無難に抜けて、ほつと、長
屋の前まで来か、ると……下駄がぐれた。時に片側残る並木の
土堤の——下は薙草が枯れぐ、鳴った小川があった——夕暮の
風の、松の根方で聞こえたのが……あーをば、しーげれる、さ
——くらゐの……子供心に聴きほれました。見ると、さきの姉
弟が小さく並んで、口一杯に、寒い水田を渡って吹きつける風
に逆らって、東の方を……東京の方を向いて、悲しい声で……
初めて知ると、長屋の一軒の土間が、小さな、鍛冶屋といふ
のみの鉄工場の構へで——案外歳とつた、しかし肥って、頭の
禿げか、つた父親が、油染みた洋袴に短衣姿で鞆たもとに坐り——
廂の陰に佇つてゐたのが、これは年配も姉弟の母らしく、眉目
も優しい、姉弟によく肖た婦人おんなで、品よくすらりと、片手を帯
に。著たものとて、何と、奥さんといふ柄でした……が、場所
なり、冬の日の暮れなりで……しゃんとした容態かたちが却って……
浮世の風に、東京を零落れて街道筋の松の陰、そこへ小さく罫
を求めた渡り鳥といふ、もの、哀れを覚える状の——ま、さし
むき鏡花先生あたりに願ひたい処で——其の小母さんが、子を